

## 詩歌・小説の中のはきもの (第25回)

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

239 ときと場所にもよるが、男性の靴に関してはあまりにも磨きたてられているのは苦手だ。電車などで、ずらりとならんだところを見ていていつも思うのだけれど、黒でも茶でもぴかぴかの革靴は、カブトムシやクワガタムシを想像させる。硬い表皮におおわれた、それだけで独立した生きもののようだ。 蜂飼 耳

★『孔雀の羽の目がみてる』の「履く」から。著者は、黒色、ストラップ付きの、ヒール4センチの変哲のない、同じタイプの靴しか履かない。足に合い、下ろした瞬間からすたすた歩ける靴が理想なのだという。私もドイツ生まれの足にぴったりと合った、その代わりいくら磨いてもピカピカ光らない、考えようによっては可愛げのない靴を何十年も履いている。「靴を見ればそのひとがわかる、ともいうが、本当だろうか」著者の疑問も私の疑問とするところだ。

240 靴紐を大路に結ぶ暑さかな  
有吉 薫  
靴の紐いつか討たれる日の予感  
猿田寒坊

★『俳句 (角川書店)』と『現代川柳選集』から。1首目、暑さにだらけかかった自分の心を引き締める。往来する人たちの間で、まるで短距離競争のスタートラインにある選手のように屈みこんで紐を結ぶ。2首目、出勤前の玄関で靴紐を結びながら、決意を新たにするものの、時に弱気になってしまう。何しろ外に出れば、7人の強力な敵が待ち構えているのだ。

241 『装苑』っていうのでグラビアにおしゃれのページがあってね、白い背広上下着て写ったことあんですけど。照れるんですよ、どっか。あまりキメこむと、着こなすっていうことに照れるんです。だから白い上下の背広着て、バンドもフランス製のきちっと締めただけけれども、靴だけがヘンなんです。白い粉が吹いたようなカビがはえてて。ひとつ崩したくなっちゃうのね。おしゃれはするけど、一点崩壊って感じで。 唐十郎

★『水の廊下』から。一点豪華主義というのは聞くが、「一点崩壊主義」というのは珍しい。豪勢な韜晦だ。靴の部分で崩して、全体のバランスをとるというのは、たしかに効果的である。唐十郎は「お前の前身はなんだっのか？」と訊ねられたら、タニシと答える覚悟をしているという。指先が短く親指が太い、指を広げると幅があり、田んぼの泥んこを踏むのに一番合った足で、じっと見ているとタニシのたぐいだとしみじみ思うというから、足をいつも意識しながら崩しているのである。

242 小屋に戻ると、彼はぼくに一そくの木靴をくれた。それまでぼくはみんなの穿いている木靴を羨ましいとは思ったが、革靴のように売ってもいず、手に入る工夫も知らず、始終、水びたしの足に、ただの破れ靴か草鞋しか穿いていなかったのである。 吉川英治

★『忘れ残りの記』から。明治42年、吉川17歳、横浜ドックで働いていたとき、木靴

を履いたのだという。吉川は木靴の作り方を詳細に記している。「まず靴の底からつくる。…皮革の部分はズックで作る。ブリキ板の細い帯状に切り、木の底部の縁とズックの被包面との継ぎ目を縫い糸の代りに鋏でトントンと打ち止めるのである。…案外丈夫で、何よりも足が暖かい。だから船具部ではこれを穿いていない者はない。」

243 雑誌をめくっていたら、リンカーン、ジョンソン大統領が履いた靴の写真が載っていた。私はそれを見て仰天した。今まで見慣れていた紳士靴の形と違って、まるでへちまみたいだったからだ。幅が異様に細くて、足の甲からつま先にかけてが、ものすごく長い。こんなのが日本の靴売り場に置いてあったらみんな大笑いしてしまう。 群よう子

★『肉体百科』から。群は、雑誌でオーダー・ハップバーンとソフィア・ローレンの足幅を見て、余りに細いので誤植だろうと思っていたが、この写真を見て誤植ではなかったと知った。私の友人がパリの下町で靴屋に入ったところ、店員が足を見るなり「コーサン」と日本語で言ったそうだ。足幅の広い同胞の先客がこの店員を困惑させていたらしい。

244 拝啓、七月二日付お手紙への御返事として左記のごとお知らせ申し上げます。愚見によりますと、一流の靴屋を必要とする形跡をコラリオの町よりもはつきりと示しているところは、地球上いずこにも見あたりません。当地には三千人の住民が居住いたしており、しかも靴屋はただの一軒もありません！その間の事情は、おのずから判明することと思いません。この海浜は急激に企業心に富む実業家たちの目的地となりつつありますが、靴販売業は、悲しいかな、無視され、ないしは見落とされてきたものの一つであります。要するに、現在実際に靴をもたぬものが当町の住民にはかなり多数存在しているのであります。なお上述の欠乏品のほかに、醸造屋、高等数学校、石炭

置場、清潔で知的な人形芝居などを要求する声もごぞいます。 敬具

○・ヘンリー

★『靴』から。勤務に飽きた合衆国コラリオ領事、J・G・アッウッドは、友人の問い合わせにこのような回答をでっちあげた。行進のときだけ靴を履く兵隊を入れても20人以上は「歩行装置に革の感触を感じた」者はいない熱帯の国に、財産を売り払って、アメリカ北部で買えるかぎりの立派な靴を4千ドルも仕入れた友人がやってきた。狼狽した領事は一計を案じた。この作者の短編は最後の数行にドンデン返しがあるので、紹介はここまで。

245 靴を持って出る。出て見れば、「直し」は既に、荷籠を左右に控えて、大地に坐り込んで居る。靴を揃えて其前に置くと、大きな手を差し延ばして、先ず右足の方を取り上げて、精密に検査する。

「横腹と、裏と二ところ破れて居ますな」

「横腹は何処も破れて居ないだろう」

「いや、今こそ破れて居ませんが、もう二三日も御穿きになれば、直ぐ破れます。へい、受け合うて破れます」

内田百閒

★『続 百鬼園随筆』（昭和9年刊）から。「直おーしッ、下駄の歯がえ」という声を聞いて、頬かむりをした大男を呼び止めてのやりとりである。人力車に乗って車賃にもならない借金をしに行く。そんな借金生活を書いて原稿料を稼いでいたことは有名。当時社会的権威の高かった大学教授が穴のあいた靴を履いていてはどうしようもない。値切り交渉の末に、結局52銭払っている。

246 箱の左側の下に靴が二足、赤と黒だ、並んで居る。毎日穿くのは戸の前に下女が磨いて置いて行く。其外に禮服用の光る靴が戸棚に仕舞つてある。靴ばかりは中々大臣だなど少々得意な感じがする。若し此家を引越すとすると此四足の靴をどうして持って行かうかと思ひ出した。

一足は穿く、二足は革靴につまるだらう、然し餘る一足は手に下げる譯には行かんな、裸で馬車の中へ投げ込むか、然し引越す前には一足は慥かに破れるだらう。

夏目漱石

★『倫敦消息』から。前項の百閒は漱石の弟子の一人。ロンドンにいた留学生がどんな履物を所有していたのか、貴重な記録である。漱石によれば、下宿していたところは、「東京で云へば先づ深川だね。橋向ふの場末」で、そこに蟄息していたのである。それだけに靴に関しては、4足で“大臣”だと自嘲気味に言っているのが興味深い。

247 玄関で靴を履くという習慣をぬかして、靴下のまま扉の外に歩みでるほど、私は無神経ではない。そんなことをすれば、小石などのある道路のうえで、足の裏がすぐ痛くなるのではないか。また靴下もつけずに、素足を靴のなかに突っこむほど、無神経でもない。そんなことをすれば、靴の内側の皮に擦れて、足の皮膚が気持わるくなるのではないか。今は、つるつるの舗道を歩いているから、足の裏はべつに痛くないし、そよ風があたる素足は、かえってすこし気持がいいくらいのものだけれど。

そうなると、家からここまでの途中のどこかで、靴も靴下も不意に消えてしまった、ということなのだろうか？

清岡卓行

★『夢を植える』から。清岡は夢をしばしばモチーフにする。靴の夢判断はなんなのだろう。フロイトを始祖とする精神分析では、夢に現われる靴は女性、足は男性ということになっている。私の場合、沼地に足を取られ、靴がぬげていくら探しても分らないという夢をときどきみる。女房に逃げられるということか？そんな夢をみるときは、大抵踵が減り始めて、どの段階で新しいものに履き替えようかと迷っているときである。沼地が吝嗇あるいは優柔不断を象徴しているのかも知れない。

248 「いや、きみこそ、ちょっと黙って聞けよ！ わたしはグレンジャー製靴会社が好きなんだ。あの工場には過去二十六年間、倉庫の小僧をふり出しに十六の年から勤めてきたんだ。軍隊にとられた時期をのぞいて、わたしは文字通り自分の青春をこの会社で暮らしてきたんだ。あの工場のことなら、どんな音も、どんな匂いも、どんな仕事もすっかり知りつくしている。それに、靴のこともわたしは知っている。いい靴だ。品質のいい靴だ！ こんなガラクタに、グレンジャーの名をつけたくはない！」

エド・マクベイン

★『キングの身代金』から。“世界一お人よしの消費者ミセズ・アメリカ”をターゲットに、1足7ドルのスチールの踏まず芯も入っていない、ひねるとパチンと踵のとれてしまう靴を、名の通った高級品の商標をつけて売りまくろうとする経営陣にダグラス・キングは抵抗する。黒澤明・三船敏郎コンビの『天国と地獄』で映画化された。東野英治郎の登場する靴工場のシーンは、私が勤務していた横浜の工場で撮影された。